

第12回山口大学国際総合科学部教育後援会理事会議事概要

日 時：令和7年7月26日（土）10時00分～11時02分

出席者：上田顧問、池田理事、塚本理事、春吉理事、染岡理事、堀家理事、阿部理事、
山井監査、古田幹事、久光幹事、伊本幹事、杉本幹事、小川広報委員長

欠席者：後藤監査

議事に先立ち、事務部から、本理事会の議長は、議題1で選出される今年度後援会会長に委任したい旨提案があり、承認された。

引き続き、新年度の教育後援会理事会構成員の紹介及び挨拶があった。

議 事

1. 令和7年度役員の改選について（資料1、資料2）

事務部から、資料1及び2に基づき、令和7年度の役員について紹介した後、今年度の会長及び副会長について、立候補者がいない場合は、慣例により3年生の保護者（塚本理事）を会長、2年生の保護者（春吉理事）を副会長としたい旨諮られ、承認された。

2. 令和6年度決算報告について（資料3）

事務部から、資料3に基づき説明があり、原案どおり承認された。

3. 令和6年度会計監査報告について（資料4）

山井監査から、資料4に基づき監査を行った結果、適正に処理されていることの報告があった。

4. 令和7年度事業・予算（案）について（資料5、資料5-1）

事務部及び上田顧問から、資料5に基づき、令和7年度事業・予算（案）について説明があり、引き続き、小川広報委員長から資料5-1に基づき、5月にメール審議にて承認された、国際総合科学部創立10周年記念事業に係る50万円程度の支援について、事業内容の詳細な説明があった。

外部理事から、短期留学制度の支援について、令和6年度は13万円を4人へ、令和7年度は10万円を5人に補助しているが、昨今の円安の状態で、金額を減らして大丈夫なのかという質問があり、上田顧問及び古田幹事から、この制度は3～4年前にできた制度であり、当時から予算は総額50万円程度であったが、多くの学生の支援を行いたいという意図があり、支援金額を上げて対象者を減らすか、支援金額を下げて対象者を増やすかという考え方になる旨説明があった。併せて、昨年度と今年度では、今年度のほうが短期語学研修に係る個人の負担額が減っていることも要因の1つである旨説明があった。また、今年度は、創立10周年記念事業への予算も組むことから、短期留学制度への支援金額を増やすことが難しく、来年度は、その時の社会情勢をみて、支援金額を判断したい旨説明があり、審議の結果、

原案どおり承認された。

引き続き、上田顧問から、本学部教育後援会未加入者に対する卒業記念品の配付について確認依頼があり、審議の結果、令和7年度事業・予算（案）について、後援会費納入の有無にかかわらず、卒業生全員に卒業記念品の配付を行うことが承認された。

5. 国際総合科学部短期語学研修支援制度の変更について（資料6）

杉本幹事から、資料6に基づき、国際総合科学部短期語学研修支援制度の変更について説明があり、審議の結果、承認された。

（主な変更点は次のとおり）

- ・経済的理由による家計基準を明確化し、独立行政法人日本学生支援機構第一種奨学金の家計基準に準拠することとした。
- ・制度開始から、選考方法の一つとして面談があったが、過去に家計基準を大きく覆すような面談結果はなく、どの学生も等しく短期語学研修受講を希望して面談に望んでいるので、家計基準により支援を決定することとした。
- ・「家計の急変」を証明する書類を提出することが難しいのではないかという意見があり、この条項を削除した。

6. その他

（1）国際総合科学部の概要説明について（資料7）

上田顧問から、資料7に基づき、学部の概要について説明があった。

（主な説明は以下のとおり）

- ・組織、教員数、卒業要件等について説明があった。
- ・養成する人材像、TOEICのスコア取得状況、留学状況、就職状況等について説明があった。

特に、就職については、学部の教育が外部にどのように捉えられているかを知る一つの指標にもなると考えており、就職支援には力を注いでいる旨説明があった。

また、2024年度は就職率が100%ということもあり、一部メディアで、就職に強い学部として紹介された旨説明があった。

学外理事から、山口県内の就職者数について質問があり、上田顧問、阿部理事及び事務部から、本日は詳細なデータは準備していないが、例えば都市部で採用されたが、研修後、地元に近いところに配属されたという話を学生から聞いており、また、入学者は福岡県、広島県出身者が多いが、それらの学生は地元に戻って就職することが多い状況について説明があった。

（2）入試及び就職活動における早期化について（資料8）

上田顧問から、資料 8 に基づき、入試及び就職活動の早期化について、意見交換の場を設けたい旨提案があり、上田顧問から、前提となる現在の状況について概要の説明があった。

(主な概要説明は次のとおり)

- ・国際総合科学部では、現在、3 種類の入試を実施しており、それぞれの入試から多彩な学生にきてほしいと思っている。また、これらの入試とは別に、推薦型入試を実施するよう検討し始めているところである。というのも、私立大学が多様な入試を何回も実施しており、また時期も、夏明けから動き始めている。国立大学は、2 月に一般入試が実施されるので、どうしても私立より遅くなり、私立大学に優秀な学生を取られてしまうのではないかとっている。そのようなこともあり、文部科学省、各国立大学が推薦入試を増やすことを検討している状況である。また、保護者の方のアンケートなどでも、早く入試を終えたいという意見があると聞く。

対して、高校側としては、入試の時期が前倒しになると、約 2 年半でカリキュラムを終えなければならず、また多様な入試対策も行っていかなければならないので、対応が大変になるという側面もあると思われる。

- ・就職については、3 年生の夏休みは、まだ留学から帰ってきていない学生もおり、そのため、留学先で、就職活動について遅れをとっているのではないかと悩んでいる学生もいる。3 年生になったばかりの春休みや夏休みに、教員側がエントリーシートの作成をすることが増えてきていると感じる。4 年生になる前の 3 月からが就職活動の本番なのだが、少子化、人手不足のなか、企業側も早く優秀な学生を確保したいという風潮がある。そうすると、大学の学びも 3 年間でということになってくるのが悩ましいところだと感じている。

(学外理事からの主な意見は次のとおり)

- ・子供をみると、高校の時にやりたいと思っていたことが、大学に入り変わってきている様子である。せっかく留学に行って知見が広がったのに、就職活動の早期化は、そういったじっくり考える時期を狭めるのではないかと思う。

また、推薦で大学に入った別の姉弟は、卒業の時に大変だったといていた。国際総合科学部に一般入試で入った子供は、受験の時に苦しんだが、長い人生において、そういう時期も必要なのではないかと思う。

- ・子供は、一般入試を受験して、集中力と忍耐力、学力が上がったと思う。子供のなかでは、あの時を乗り越えたことがよい経験になるのではないかとっている。英語の勉強や留学がしたいと入学したが、今は、いろんなことに興味が広がり、広がりすぎるとまた悩むのかなと思うが、長い人生を思うと、この学生時代にしか経験できないことがあるのかなと思う。あせって事を急ぐともったいないのかなと思う。

- ・もし県外の大学へ行く場合は、引っ越しもあり、仕事を持つ親としては休みを取得しないといけないなど対応が難しい面がある。早期化になると、引っ越し等の面ではよいと思われる。

- ・入試にしても、就職にしても、早期化は時代の流れだと思っているが、子供の4年間を見ていると、苦手な理系科目の単位修得のため勉強に励み、留学に行き、帰ったらすぐに就職活動で、とても忙しいと感じている。

- ・入試や就職が、あまりにも目的化していて、長い人生のなかで、もっとゆっくり考える時期があってほしいという思いがある。正直、早期化がよいのかどうかわかりかねる。